

余市水産加工業の歴史

□ 漁業の町 余市の始まり

余市の水産加工の歴史を縮くと、17世紀の松前藩時代の「余市商場」の頃に遡り、余市は、鯧と鮭の漁場と知られ、古くからの先住民族や和人が移住してきたことにより、松前藩は蝦夷地と和人を区別し、蝦夷地の中にアイヌ民族と交易する高い場を設け、これを上級家臣に分与していました(商場知行制)。その後、商場知行制の拡大・変質と徐々に進行する商人請負の展開によって「商場」から場所請負制へと変わった後は、「ヨイチ場所」として拓けていきました。

加工品にあっては、明治・大正・昭和・平成の四代にかけて年々の苦心と研究を重ね、地域の基幹産業として発展してきました。

明治に入り、場所請負制が廃止され、開拓使余市出張所がおかれ、商船(北前船、弁財船)と漁業者との漁獲物及び製品販売の円滑化を図るため、問屋業が始まり、明治10(1877)年には、「余市郡鯧漁業組合」、「余市郡鮭漁業組合」が創立されました。

また、小樽が金融・海運・陸運で発展していったことが、余市にとっても好影響につながりました。

北海道の動きとしては、東北(日本海側)・信越地方には、身欠鯧、塩鮭、塩鱒が、北陸諸港には、胴鮭、笹目鯧、鯧粕、身欠鯧が、さらに瀬戸内海諸港には、鯧粕、胴鯧、昆布、数の子が移出品として取引され、全国的に名声を高めていきました。

明治18(1885)年には、余市郡鯧漁業組合、余市郡鮭漁業組合が合併し、「余市郡漁業組合」となりました。当時の余市の漁獲高は、明治元年 鯧15,135石、明治2年

鯧13,808石、明治3年 鯧、鮭、ヒラメ21,433石、明治4年 鯧、鮭、ヒラメ、鯧、干鮑、海鼠、昆布などの漁獲がありました。

余市では、鯧が豊漁のため、身欠鯧や鯧搾粕などの加工品の生産が中心になり、明治20(1887)年には余市水産組合の前身となる「余市郡余市水産物営業人組合」が設立されました。

明治25(1892)年、余市郡漁業組合は、水産物製造業者を加えて組織を拡大し、「余市水産組合」を設け、商取引も京都、大阪、四日市方面に拡張し、明治36(1903)年には、余市水産組合、水産物製造業者、水産物販売業者を網羅した「余市水産組合」が設立されました。

大正に入ると、漁業法の改正により、「余市郡漁業組合」が新発足し、余市水産組合は解散する方向で、新たに「後志水産会余市支部」になりました。

その頃、余市の鯧は、四季を通じて食糧に上るようになり、国内水産業の要として、「鯧の余市」「余市の鯧」と言われるほどになりました。

しかし、昭和に入ると、全道の鯧漁獲高が10万石に満たないという史上かつてない大凶漁になり、全道の漁場は窮地に陥り、余市をはじめ後志沿岸もその対策に迫られました。この重大な局面において余市水産組合及び余市郡漁業組合では、会員の窮状を救うため、樺太・留萌から生鯧を移入し、共同加工しました。

昭和5(1930)年には、「余市鯧加工組合」が設立され「漁業の町 余市」から「加工の町 余市」への転換が図られました。



鯧陸揚げ作業 奥寺家



生鯧箱詰め作業 奥寺家



鯧粕出荷作業 奥寺家